

現代社会を『関係性』という観点から考える

② Society から Home へ 矮小化していく社会

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦 恵子

連載 14 では『「開く」ことと「閉じる」こと』について書かせていただきました。その後、連載 15 では『つながりが支えるところ』と題して、我意を通し続けた結果「閉じる」生活となってしまい社会的孤立に至り、心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継いで、『「見える」ことと「見えない」こと』という切り口から、現代社会を関係性という観点から考えてきました。それを受けて連載 17 では、これまで述べてきたことを踏まえ、「地域社会」との「関わり方」を考えるというタイトルで、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。つまり、「地域社会」で生きるということ、について考えてきたともいえます。また、現代社会においては、（望まない）「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあります。例えば家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。これに関しては連載 19 で

「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということというタイトルで問題提起をさせていただきました。連載 19 回で「自分は誰かとつながっている」という感覚を持つために私が必要だと痛感している『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について述べさせていただきました。連載 20 では、『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽というタイトルで、コロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について述べさせていただきました。

今回は、一冊の本との出会いをきっかけに、Society から Home へ 矮小化していく社会について考えてみたいと思います。非常に粗削りなものであり、学術的な論考とは程遠いものなのですが、私自身はこのことを継続的に考えていきたいと思っていますので、今回はあくまでそのアウトラインについて述べさせていただきたいと思います。

1 一冊の本との出会い『司法の場における法と信頼との相互補完的關係（著者井上眞理子先生）』

おそらく御縁がなければ触れることがなかったであろう一冊です。私自身は刑事政策に関する法や制度に関しては業務の必要上学んでいます、法学は大学の一般

教養どまり、特に民法に関しては、いまだに苦手意識がかなり強いと考えています。ただ、私の臨床実践における主たる着眼点「現在社会における関係性」を考えていうことで、「信義則」や「信頼」（必ずし精緻な定義に基づくものだけではなく、大まかに理解されてきたものでもよろしいかと思えます）が、この期に及んで大きく変容してきているのではないのかという実感（これはもはや危機感に近いといっても過言ではありません）があります。私が所属する職能団体「日本精神保健福祉士協会」分野別プロジェクト「貧困問題」（協会 HP で公開されており誰でも閲読できます。）では、「信頼の貧困」をテーマにした大阪市立大学野村恭代先生の論文に触れて感銘を受けましたが、単に貧困とはモノやカネばかりではないのだということを、刑事政策や生活困窮者支援における処遇場面を見て実感することも少なくありません。

2 「信義則」について

「信義則」としてまず想起されるのは民法の下記の規定でしょう。

（基本原則）下線部は筆者が付したもの

第一条 私権は、公共の福祉に適合しなければならない。

2 権利の行使及び義務の履行は、信義に従い誠実に行わなければならない。

3 権利の濫用は、これを許さない。

人は契約等特別な場面はあくとして、日常生活を営む際に何かをする時に「これは法律に抵触するか」ということを一つ一つ吟味しながら自身の行動を決定しているわけではむしろありません。しかし、社会における「ルール」といったものについては、無用なトラブル回避のためという消極的理由であっても、それを遵守しようと考えてきたといえるのではないのでしょうか。そして、現代社会における様々なルールの根底にあるのは、上記「信義則」であったといえるのではないのでしょうか。

ただ、その一方で、各地を異動（転勤）して私が感じたことではありますが、集落共同体や分家・本家関係における紐帯が密な地域では、様々な問題解決システムとして、「役所の窓口相談に行くこと」などフォーマルな手段を選択することはかなり敷居が高く、「本家に伺いを立てる」といったインフォーマルな形を選択することがいまだ残っている場合もあると思えます。その場合は、その地で長年培われた対人関係やイエ同士の関係性の中で、その土地に応じた様々な行動指針などが醸成されてくるのだと考えます。

ただ、民法に記され、様々な機会に使用される言葉でもある「信義」「誠実」という言葉の「重み」とでもいえるべきものが、現代社会における関係性において変容してきていると私は考えています。

その結果の一つが、「(自分や自分の家族の) 権利の行使のためにはあらゆる手段を行使しても当然」という考え方や行動に対し、周囲が抑制的に動くのではなく、「パニック買い」等のように行動の連鎖を招くようになってきていることだと感じています。その行動容態の1つを切り取って、●●ハラスメント、モンスター●●という言葉も次々と生まれています。

コロナ禍初期、店舗ではマスク等の欠品は日常的なものでした。客がスタッフに欠品を責めて在庫を出せと詰め寄る光景もまた珍しいものではありませんでした。仙台で偶然乗車したタクシーの運転手さんが、「東日本大震災の時の方が、まだみんな互いのことを気に掛け合っていた」「不便な生活だったけれど、全国からの支援に対

する感謝の気持ちがあった」と話しておられたのが印象に残っています。

資格を取得し意欲に満ちて薬局で働き始めた若者が、こうした客との交渉に日々疲弊して行ってしまい、ついに離職したということも私の身近で起きました。医療従事者やエッセンシャルワーカーに対して、感謝を率直に表す人もいる反面、感染を恐れ露骨に差別的な態度をとる人の存在も耳にしました。ごく普通のおじさん、おばさんだった彼らが突然当時の言葉の「自衛警察」と化していることへの戸惑いは、他に例えるものがない違和感でした。ともかくも、コロナ禍は人間の負の感情、特に不安感を吐露することに対する躊躇を奪ってしまったと感じています。

しかし、「自分だけ」「自分の家族だけ」が何とかなればよいという心的傾向は、コロナ禍以前からあったのではないのでしょうか。たとえば、交通事故後の様々な保険処理において、加害者側の保険会社が被害者や遺族に対し苛烈な交渉を行い、その結果被害者等の感情が著しく損なわれる事例を、私は業務上（更生保護における恩赦など）で少なからず体験をしました。そして、この件について、被害者団体（あすの会）から監督官庁に対し、そうしたことがなされないよう申入れがなされたという報道にも昨今接しています（毎日新聞その他）。

コロナ禍当初「ステイホーム」が、「新しい生活様式」を表すものというよりは「新しい流行語」のように盛んに叫ばれましたが、「ステイホーム」という言葉自体が、帰る家のない人々や家庭に居場所がない人々のことを配慮の外に置いた、排他的なものではなかったのではないのでしょうか。少なくとも、困窮ゆえに犯罪や非行に及んだ人の処遇を日常的に行い、社会的養護やホームレス支援の端に加わっている私にはそう感じられました。

そして、ようやく今回のテーマにたどり着くわけですが、「社会」というものが、限りなく矮小化し、ついには「私」や「私の家族」だけになってしまうのではないか（むろん様々なシステム～行政など～としての社会は残っても、人々が口にする「社会」の意味合いが小さくなるという意味においてですが）、とも感じるようになりました。

3 揺らぐ「社会に対する信頼」？

刑事政策から年金制度に至るまで様々な制度が円滑に運営されるためには、緻密な制度設計や運営する側の態勢はもとより、人々の「社会に対する信頼」が必要不可欠です。そしてそれはつまるところ、その執行や運営、公平性への信頼であるといえるでしょう。

社会関係司法（ソーシャル・キャピタル）の研究などで著名なパットナムは、信頼を「社会的信頼」と表現し、それは、市民あるいは人間にとって社会が公正で援助的であると「見なされる」信念であるとししました（芝内康文訳『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房 2006）。一方、日本においては、山岸俊男が述べるように「安心」と「信頼」を区別することで「信頼」について説明している（山岸俊男『信頼の構造～こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会 1998年）。安心も信頼も人々の心理をリスク管理者の「ひどいことをしないでだろうという期待」と「任せておこうという方向」に導く心理的要素であるという共通性がありますが、発生の仕方は下記のように大きく異なっていると言われています。

安心：リスク管理者がだましたりすると、リスク管理者自身の不利益になると住民が見なすことにより生じるもの。

信頼：住民がリスク管理者の自己利益に対する評価を行うこと以外の要素に基づく「意図の期待」のことを示すものであるとしている。

つまり、信頼とは不確実性があるにも関わらず、それでも何かを他者に委任しようとする理的状态であるといえとされています（注：社会関係資本～いえる、まで日本精神保健福祉士協会 HP「貧困問題」野村恭代氏の論文から引用）。

私は現代日本における関係性において、社会に対する信頼が大きく揺らぎながら、その一方で根拠のないネット上の論理が独り歩きする傾向に危機感を覚えている者の一人です。刑事政策分野でも、90歳代（本件で負傷）の被疑者が逮捕されない理由として「元高級官僚だから」「上級国民への忖度」とまことしやかに語られていましたが、彼の身柄を拘束することに伴う法執行側の負担やリスクなどを考えると、やむをえない判断ではなかったかと思えます。

「年金制度は将来破綻するので保険料を支払わないで貯金する」という言説も頻繁に耳にするものですが、「年金制度は世代間扶養」という基本的事項を踏まえていない議論も多数見受けられます。しかしこうした言説に根拠を確かめることなく人が同調する背景には、社会に対する信頼の低下、不公平感の強さがあるのではないのでしょうか。しかも現在日本では、社会や社会制度に対する不信や不満を制度の改変に向けて動くのではなく、自分や自分の家族といったごく狭い範囲（これが現在の関係性における「社会」と各自が定義している）を守ればそれでよしとする方向、換言すれば自分や家族を安全なカプセルに収め「閉じていく」傾向があるのではないのでしょうか。こうなるとむしろ「社会に対する信頼」が揺らいでいるというよりも「社会」の概念自体が極端に矮小化しているという懸念をぬぐえない。

「私」「私の家族」という「狭い社会」だけで通じる「常識」は、実は単なるマイナールールに過ぎないはずですが、それを基準に物事を判断し行動するとき、「信義則」という概念はおそらく置き去りにされてしまうだろうではないのでしょうか。

4 「信頼」という概念

「信頼」についても、その概念自体が揺らいでいるのではないのでしょうか。「信頼」は、対人援助の場面における援助望希性を考える際の課題として扱われる場面が多かったのではないのでしょうか。生活困窮者支援等の場面で、明らかに支援が必要な状況にあるのに、当事者本人に介入を拒まれる場面は少なくありません。「差し伸べられた手をつかんでよいのか」という不安が当事者側にあることについては、社会に対する信頼という観点から熟慮が必要であるし、支援者側自身が当事者側に安心できる雰囲気や環境を与えているのかどうかという振り返りも必要ではないのでしょうか。「信頼」は短期間では醸成できません。原家族で適切ではない養育を受けていたりすると、訓練された支援者が介入しても当該支援者との関係構築には時間を要するともいわれており、私も臨床でそれを実感してきました。

5 その一方で増えている特殊詐欺という現状

「自分だけ」「自分の家族だけ」が大事という気持ちが強くなると、目の前に支援

を必要としている人がいても目に入らなくなってしまう。また、「自分の家族」を質にとられるような犯罪（代表的なものが特殊詐欺）が急増している背景には、何度か述べたように「社会」という概念が矮小化しているがゆえに、自分にとって社会の全てである家族に危機が迫っていると感じると冷静な判断ができなくなってしまう所以ではないでしょうか。

また、「特別に金員を受給できる」といった給付金詐欺の被害増加の背景には、現代社会における関係性において、「社会は自分を守ってくれない」「せめてお金だけでも蓄えておかねば」という心理があると私は考えます。

6 Society から Home へ 矮小化していく社会

「社会」という概念は、どんどん矮小化し、もはや Society から Home と同義になってしまうのではないかとするのは杞憂でしょうか。「だって家族から当たり前」という理論で縛る家族関係のいびつさは本編で何度も述べましたが、それは子どもを社会的存在だと認めず、自分だけのルールが通じるホームに囲い込むことの病理性は、親子関係だけではなく、社会の存在をも危うくしていくのではないかと考えています。

執筆者近況

当方は持病ゆえに装具をつけて活動しています。そうした装具を「弱者」「助けを求める者」の記号として解釈する立場に立つ人が一定数いることは了解していますし、それを巡る論争なども目にしたことがあります。

しかし私はあくまで療養の必要上医師の指示によりそれらを装着しているにすぎないのであり、実際にそれらの装具が生活の質を上げ公務に取り組む際の効率化につながっていることは否めないのです。そうした議論とは距離を置きたいと考えていました。

しかし、今回思わぬ形で装具をつけることが他者にどういった印象を与えるのかと、私自身が受け止めてしまうような出来事があり、自分が自分の疾病や装具を着用することを受容できていないことに何よりも動揺しました。しかしその日の帰路、公共交通機関内で転倒しあわや事故になりかけたとき、差し伸べられた幾人もの手によって事故を免れるという出来事がありました。

「装具」という記号を巡り様々に考えさせられた一日でしたが、今は、差し伸べられた手の温もり、そしてそのリアリティを信じようと思っています。

コロナ禍の中、様々な立場の人が、互いのことを思いやりながら生活できればと強く願っています。